

第32回獨協インターナショナル・フォーラム
アルベール・カミュ：生きることへの愛
発表者プロフィール・発表要旨

12月2日（木） - 12月3日（金）

21:15 - 21:30 : 開会式

21:30 - 22:30 : 講演会 I

三野博司：カミュの作品における「愛」

司会：高塚浩由樹

【プロフィール】三野博司（みのひろし）は、京都大学卒業。クレルモン=フェラン大学博士課程修了。奈良女子大学名誉教授。国際カミュ学会副会長および日本カミュ研究会代表。著書に、*Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus* (Paris, Corti)があり、カミュに関するフランス語の論文を *Études camusiennes, Revus des Lettres modernes, Présence d'Albert Camus* に発表している。日本語の主な著書には、『カミュを読む——評伝と全作品』『カミュ「異邦人」を読む』『カミュ、沈黙の誘惑』、『「星の王子さま」の謎』『星の王子さま事典』『「星の王子さま」で学ぶフランス語文法』、『新リュミエール』（共著）がある。また主な訳書に、カミュ『ペスト』、シュペルヴィエール『沖の少女』『ノア方舟』、エリック・ファーフ『みどりの国 滞在日記』がある。

【要旨】カミュの名は『異邦人』と『ペスト』によって知られており、この二つの小説は、それぞれ不条理および反抗を主題とした作品群に属している。彼はそれに続く第三の「愛」の作品群を構想していたが、早世のため未完に終わった。しかし、愛の主題はカミュの全作品の根底にある。そこにおいて「愛」がどのように描かれてきたのかを、第1章「生きることへの愛」、第2章「恋人たちの愛」、第3章「母と息子の愛」にわけて考察する。

休 憩

23:00 - 00:30 : セッション I: 『幸福な死』から『異邦人』へ

司会：千々岩靖子

ジェイソン・ヘルベック『幸福な死』における「幸福への要求」あるいはカミュ的認識の「華麗な播種」

【プロフィール】ジェイソン・ハーベック：ボイシ州立大学（アメリカ合衆国・アイダホ州）フランス語・フランス語圏文学教授、世界諸言語学部長。カミュに関する研究成果に、『作家のトポグラフィ：アルベール・カミュの生涯と作品における空間と場所』（Vincent Grégoire との共編、Brill, 2015）のほか、論集への寄稿（*Esprit Créateur, Présence d'Albert Camus, L'Herne Camus, The French Review, Francophone Postcolonial Studies* など）や、多数の書籍の分担執筆などがある。また仏領アンティルの文学に関心を持ち、とりわけ Évelyne Trouillot, Daniel Maximin, Maryse Condé, Raphaël Confiant, Fabienne Kanor, Patrick Chamoiseau といった作家を研究している。Évelyne Trouillot の小説 *La Mémoire aux abois* (*Memory at Bay*, University of Virginia Press, 2015) に後書きを寄せているほか、アンティル文学を扱った著作『テキスト構築の真正さ：仏語圏カリブ海における文学と文学的アイデンティティの構築』（*Architextual Authenticity: Constructing Literature and Literary Identity in the French Caribbean*, Liverpool University Press, 2017）を発表している。

【要旨】本発表では小説『幸福な死』を取り扱う。若きカミュがこの作品を通じて、生きることへの愛、そしてさらには病气や死についてどのように考察したのかを明らかにする。まず、主人公メルソーが殺人=自殺から「あの八時間から解放される生活」に至るまでの道のりを辿る。次に、メルソーの「幸福への意志」を、『シシュポスの神話』の哲学と関連づけたい。最後に、本小説の中心をなす「恐るべき真理」がいかんにして生前のカミュに絶えず影響を与え続けていたかが検討されるだろう。

ギヨーム・ジャンメール：『異邦人』における生きることへの愛——翻訳の比較

【プロフィール】ギヨーム・ジャンメール：博士（言語科学）。韓国語、日本語、言語学を専門とする。翻訳家、高麗大学校（韓国・ソウル）教授（2000～）。フランス語と文学・視聴覚作品の翻訳を教える。2007年にフランス語フランス文学会が刊行した韓国語＝フランス語辞典の執筆に参加。韓国・日本・カナダでフランス語教育学・翻訳学に関する複数の協会のメンバーとして活動している（日本フランス語教育学会（SJDF）、カナダ翻訳学協会（ACT）など）。研究対象は、外国語としてのフランス語教育学や、文学・視聴覚作品の翻訳。フランス語圏、とりわけケベック文学、アカディア文学にも関心がある。近年発表した論文に、「20世紀の転換点で：東アジアのアイデンティティ変容および文学変容のなかの翻訳・書字」（*Meta*, 64.3, 2019）、「（静かなる革命）をめぐるケベック文学の翻訳について」（*Neohelicon*, 47.1, 2020）がある。翻訳に、全鏡滂（チョン・ギョンリン）『私の生涯で一日だけの特別な日』（*Un minimum d'amour, L'Atelier des Cahiers*, 2021）がある。

【要旨】幸福の探究は『異邦人』をはじめ初期のカミュ作品に顕著に見られるテーマである。本発表では、複数の言語の訳者による様々な翻訳を分析し、そこでカミュの「生きることへの愛」という考えがどのように解釈されているかを明らかにしたい。具体的には、「もっとも貧しく頑固な喜び」、愛情、小さな幸福の共有、ムルソーが悔悛のなかで見いだす最期の慰め、といった要素を分析する。

渡辺惟央：『異邦人』における言葉と愛——ムルソーの言語観について——

【プロフィール】渡辺惟央（わたなべ・いお）：東京大学大学院地域文化研究科フランス科博士過程・パリ第8大学博士課程。主な論文に次のものがある。Io Watanabe, « Camus et Brice Prain : un héritage des années 30 » (*Présence d'Albert Camus* 12 (revue publiée par la Société des Études Camusiennes), 2020, p. 59-74)、渡辺惟央「シシュポスを殺すことはできるか—ブランショのカミュ論における「弁証法」」（『*Résonances*』、11号、2020年、1-16頁）、« Un logos sans Dieu : langage et banalité de *La Peste* »（『カミュ研究』第14号、2019年、68-79頁）、「カミュの「反抗」概念における超越性—ブリス・パランとの比較を通じて」（『日本フランス語フランス文学研究』、第111号、2017年、191-206頁）、「カミュにおける「表現」の問題—1940年代前半の言語観の推移—」（『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第25号、2016年、41-54頁）。

【要旨】本発表は、『異邦人』の主人公・語り手であるムルソーの言葉遣いを文法・語彙の点から分析することで、彼にとっての愛とはいかなるものかを検討する。それによって、ムルソーの用いる不明瞭な言い回しが、神学的観念を排しつつ母・恋人への愛着を表現するための言語戦略に基づいていること、さらには、世界と理性との和解という本小説の本質的テーマを表現したものであることを明らかにする。

休憩

01:00 - 02:00 : セッション II : 災厄の時代

司会：フィリップ・ヴァネ

マリー＝テレーズ・ブロンドー：災厄の時代における生きることへの愛

【プロフィール】マリー＝テレーズ・ブロンドーは、文学の教授資格を持ち、カミュ研究会の副会長を務める。また、同研究会発行の雑誌 *Présence d'Albert Camus* の編集委員会の中心メンバーでもある。プレイヤード版のカミュ新全集第2巻（『ベスト』）の編集に加わり、フランスやその他の国々におけるシンポジウムに参加。さまざまな雑誌でカミュに関する論文を発表している。近年の主な発表と論文は、次のとおりである。「*L'insoutenable vertige du sacré*」 「聖なるものによる耐え難いめまい」（*Albert Camus et les vertiges du sacré*, PUR, 2019 所収）。「*Sisyphé et Prométhée sous le soleil de la peste, à l'ombre du Minotaure*」 「ベストの太陽の下、ミノタウロスの影の下でのシシュポスとプロメテウス」（2017年10月、ブエノスアイレスにて発表）。「*Don Juan ou le démon de l'immanence*」 「ドン・ジュアンあるいは内在性の化身」（*Présence d'Albert Camus*, 2017 所収）。「*Le voyage odysseéen de Camus : retour aux origines ?*」 「カミュのオデュッセイア的な旅程：源泉への回帰？」（2017年、ミノルカ島における *Trobades Albert Camus* のシンポジウムにおける発表）。「*De l'insignifiance : les êtres mécaniques dans La Peste*」 「無意味さについて：『ベスト』における機械的な人々」, *Études camusiennes* n° 14, 2019 所収）。「*La "duplicité profonde" de*

Clarence : la confession perverse comme stratégie érotique » (「クラマンソの「深遠な二重性」：エロティックな戦略としての悪意ある告白」(Les Lettres Romanes 73, 2019 所収)。« Camus/Bruckberger. Destins croisés » (「カミュ／ブリュックベルジェ 交差する運命」(Lettres Modernes, série Albert Camus n° 24 所収)。« Camus/Grenier : un ami “capital” » (「カミュ／グルニエ：「極めて重要な」友人」, Epistolaire n° 46, 2020 所収)。« La Peste : des rats aux mouches » (『『ペスト』：ネズミからハエへ」(2021 年、Le Chambon-sur-Lignon におけるシンポジウム Rencontres Albert Camus における発表)。

【要旨】ペスト流行下のオランは、無機的・鉱物的な死の世界である。海水浴のエピソードは、自然とのまばゆいばかりのコミュニオン（一体化）の瞬間であり、世界に生きることへの愛を再導入する。この世界はまた、女性たちのいない、それゆえ愛のない世界でもある。しかし、愛することへの熱望が、後悔、欲望、あるいは希望という形で残り続けている。リュウにとっての母の愛、グランの小説の冒頭に描かれる馬に乗る女性は、病と死を癒やす薬のようなものとして、厄災に抵抗し、自分の仕事をしっかりと遂行し続けることを可能にする。

フランク・プラネイユ：世界はまだ最後に「歴史」に勝つことができるだろうか？

【プロフィール】フランク・プラネイユは、Rencontres Méditerranéennes Albert Camus の副会長で、カミュ研究会のメンバーであり、コレージュ（中学）の校長でもある。アルベール・カミュの作品に関連するマスターの講座の教授であり、数々の講演を行うとともに、さまざまな展示や展覧会の委員を努めている。

彼は、カミュの作品に関するシンポジウムだけでなく、ルネ・シャールの作品に関するさまざまなシンポジウムにも、定期的に参加している。2003 年には Bordas 社の « L'œuvre au clair » 叢書の一冊として、『異邦人』に関する研究を出版した。プレイヤッド版カミュ全集の編集チームのメンバーであり、Gallimard 社から刊行された『アルベール・カミュ ルネ・シャール書簡集』と『太陽の後裔』のテキスト校訂と、注および解説も担当した。

彼は自分のことを極めて恵まれた読者だと考えている。というのも、カミュの作品のおかげで、さまざまな出会いと発見の機会に恵まれ、常に自分に力を与えてくれる、さまざまな考察が彼にもたらされたからである。

【要旨】地球がやがて住めなくなるとしても、世界はまだ最後には「歴史」に打ち勝つことができるだろうか。結局、世界に打ち勝ったのは、実は「世界を従わせること」（「歴史」）の方だったのだろうか。この（地球の）「消滅」に直面しつつある今もなお、カミュの作品はそれに抗う頼みの綱と言えるのだろうか。彼の作品は、過ぎ去った時代の遺物に、言いかえれば神話になったのだろうか。だが、「神話はそれ自体では生命を持たない。神話は我々がそれに血と肉を与えることを待っている。」それならば、どのようにすれば神話に血肉を与えられるのか。「グローバル化」に直面しながらも、世界の忘却に抗って、いかにして、生命を求めればよいのだろうか。

02:00 - 02:15 : 朗読 I (ジョルジュ・ヴェスイエール)

12月3日(金) - 12月4日(土)

17:30 - 19:00 : セッション III : 自然の中で、または自然を前にして：生とその有限性

司会：高塚浩由樹

徐佳華 (シュー・ジアホワ) : 自然と人間のあいだで——カミュの視点

【プロフィール】徐佳華 (シュー・ジアホワ)

台湾国立中央大学人文学部フランス語学科副教授。博士論文「アルベール・カミュの創作作品における追放」によりソルボンヌ・ヌーヴェル大学（パリ第三大学）で博士号取得。その後もカミュに関する研究を続け、2021 年に『追放と王国』の繁体字中国語訳を上梓した。カミュと同時代に生きたマグレブ（北アフリカ）のフランス語作家たちについても研究している。

【要旨】カミュの作品において自然は、人間がどこに位置しているかによって異なる意味を持つ。人が自然の前に立っているのか、それとも自然の懐に抱かれているのか、遠くにいるのか近くにいるのかによって、よそよそしい存在にも相棒にもなり、あるときは証人、裁判官、そして人間の存在を正当化するものともなる。自然は外部にありながら人の内奥にもある現実で、真実の同義語をなし、生と死を縁取っている。現代人が自然を支配しようとして自然から遠ざかるのに対して、「ぼくは一切の努力は触れ合いを取り戻すことにある」とカミュは書いて

た。自然をいかに見るかを問うことは、自然と人間の関係を考えることに繋がってよう。

稲田晴年：自然を前にしたカミュ

【プロフィール】稲田晴年：静岡県立大学国際関係学部名誉教授。Société des Études camusiennes の日本支部会員。オリヴィエ・トッド著『アルベール・カミュ〈ある一生〉』の共訳者。「『最初の人間』小説か自伝か」などの論文をフランス語で *Études camusiennes* に発表。また *La Revue des lettres modernes* 誌 23 号に「L'Homme révolté est-il antimoderne ?」を発表。国際シンポジウム発表：2010 年日本、獨協大学「カミュと俳句」、2013 年フランス、スリジー＝ラ＝サル「芸術は創造を修正できるか——『反抗的人間』から『最初の人間』まで——」、2018 年フランス、アルケ＝スナン「『異邦人』の詩的文体について」。

【要旨】自我と自然との関係には三つのタイプがある。最初のタイプでは、自我と自然が向き合っている。第二のタイプでは、自我は自然に飲み込まれる。第三のタイプでは、自我が自然をおおいつくす。人間に生きる意欲を与えるのは第三のタイプである。カミュはこのタイプの関係を再び生きて、生のエネルギーを取り戻すために、チパザを再訪したのだ。カミュが十全に生きるためには、自然の前に位置を占めなければならない。

ソフィー・バスティアン：かりそめの生への反抗的な愛

【プロフィール】ソフィー・バスティアン：カナダ・ロイヤル・ミリタリー・カレッジ教授。2004 年から現職。共同研究「シュールレアリスム演劇」の成果を『演劇年鑑』第 59 号（2016 年）に発表。論集『芸術家カミュ』（2015 年）『シュールレアリスムと舞台芸術』（2014 年）『演劇への情熱、舞台の上のカミュ』（2011 年）の共同編者。単著『カリギュラとカミュ、歴史を超えた干渉』で 2007 年カナダ大学フランス語教授連合賞を受賞。ケベック文学および映画についても研究している。2015 年から 2018 年までケベック演劇研究会会長を務め、約 50 本の論文や共著書を発表するとともに、複数の学際シンポジウムの共同企画に携わった。また、各種研究機関や出版社、国際誌、カナダおよび海外の大学において、審査・評価の仕事を行っている。

【要旨】今学会のテーマである生きることへの愛について、カミュの創作作品、および必要に応じて随想や書簡集からも引用しつつ分析する。生きることへの愛は有限性の意識でもあることを念頭に、この 2 つの感情の関係を考察し、死が気ままに人を訪れることを作家はどのように表現しているのか、そこにはいかなる心の動きと調べが伴っているかを検討する。

休憩

19:15 - 20:15 セッション IV：カミュは（反）ヒューマニストか？

司会：根木昭英

竹内修一：『反抗的人間』に於ける「人間への愛」

【プロフィール】竹内修一：北海道大学教員。東京大学文学部仏文科卒。同大学院人文社会系研究科満期退学。博士（文学）。著書に『死刑囚たちの「歴史」——アルベールカミュ『反抗的人間』をめぐって』（風間書房、2011 年）、『空間に遊ぶ』（共著、第五章「無限の空間の永遠の沈黙」をまえにして——パスカルからカミュへ）担当、北海道大学出版会、2016 年）等。論文に「恩赦と恩寵——カミュに於ける「grâce」の問題」、『カミュ研究』第 9 号、青山社、2010 年、「Justice et Meurtre : Polémique sur l'épuration et *L'Homme révolté*」（『カミュ研究』第 11 号、2013）等。

【要旨】『反抗的人間』（1951）の冒頭で、カミュは彼の時代を特徴付ける「人間への愛によって正当化される虐殺」について語っている。近代史に於けるこの「人間への愛」の系譜をカミュが分析するのは、われわれの考えでは、『ヒューマニズムとテロル』（1947）で哲学者メルロ＝ポンティが表明したマルクス主義的ヒューマニズムを批判するためである。本発表では、これまでさして注目されてこなかったと思われるカミュの反ヒューマニズムに光を当ててみたい。

青柳悦子：愛の不可能性が生む愛

【プロフィール】青柳 悦子（あおやぎ・えつこ）：筑波大学人文社会系教授。博士（文学）。専攻、フランス系文学理論、小説言語論、フランス語表現北アフリカ文学。主な著書に、『現代文学理論』（1996年、新曜社）、『デリダで読む『千夜一夜』』（2009年、新曜社）など。主な訳書に、ムルド・フェラウン『貧者の息子』（2016年、水声社）、ブアレム・サンサール『ドイツ人の村』（2020年、水声社）など。ほかにアルベール・カミュの作品を原作とする仏マンガの翻訳として、ジャック・フェランデズ『バンド・デシネ 異邦人』（2018年、彩流社）、同『バンド・デシネ 客』『バンド・デシネ 最初の人間』（共に2019年、彩流社）がある。

【要旨】カミュの文学は徹底して矛盾の上に成り立っています。愛もまた同様です。カミュにおける愛は、根源的に愛の不可能性に立脚しています。この発表では、フランスの漫画家ジャック・フェランデズによるカミュ作品の翻案のシーンも参照しながら、相矛盾するものがぶつかり共存する本質的葛藤の場としてのカミュ世界を確認し、とりわけ母との間の複雑な愛、そしてアラブ人との関係について考察していきます。安易な理解や和解を越えたヒューマニズムと共生の可能性が、ここから見えてくるはずです。

20:15 - 20:30 : 朗読 II (獨協大学在学学生)

休 憩

21:15 - 22:15 : セッション V : 愛の作品群へ
司会：千々岩靖子

安藤智子：「反抗」から「愛」へ

【プロフィール】パリ・ソルボンヌ大学博士課程修了（フランス文学）、日本カミュ研究会会員、九州大学および西南学院大学非常勤講師。主なフランス語論文に「アルベール・カミュの作品におけるノスタルジー」（学位論文、2014年）、「プロティノスの郷愁とカミュの不条理」（『ステラ』九州大学フランス語フランス文学会、第33号、2014年12月、277-301頁、日本フランス語フランス文学会奨励賞受賞）。主な日本語論文に「カミュの『貧しさへのノスタルジー』 — 初期草稿をめぐって —」（『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第108号、2016年3月、193-205頁）。

【要旨】カミュは『反抗の人間』の最後で、反抗には他者への — とりわけ虐げられた者たちへの — 「奇妙な愛」が伴うことを明記し、反抗を「愛と豊穡」という言葉で再定義している。そして、この豊穡もまた奇妙な、カミュ独自の意味で用いられていることは、毒麦や苦い食物という表現が出てくるところに窺い知れる。本発表では他者および豊穡のイメージが『ペスト』から『最初の人間』にかけてどのように変化するかをたどり、「我思う、故に我らあり」の後に続く愛がいかなるものとして構想されていたかを考察する。

高塚浩由樹：「生きて、創造しなければならない」 — アルベール・カミュにおける「愛の作品群」への困難な移行

【プロフィール】高塚浩由樹：日本大学国際関係学部准教授。東京大学とピカルディー・ジュール＝ヴェルヌ大学で学ぶ。2009年以来、カミュの『手帖』の生成過程を研究。『手帖』のタイプ原稿に加えられた修正について調査し、特にその第1ノートと第7ノートを精査している。第1ノートにある「クリスマスの殺人」のエピソードは、カミュが1936年のメモの直前に挿入し、しかも『最初の人間』で主人公ジャック・コルムリーにとっての「特権的瞬間」の一つとして描写しているものだが、それが、1929年のクリスマスイブの夜に、カミュの家族が住んでいたアパルトマンの1階にあったレストランで実際に起こった事件に基づいていることを突きとめた。（「クリスマスの殺人」 — 『最初の人間』の「特権的瞬間」の一つ、『カミュ研究9』, 2010）また、第7ノートの調査から、『追放と王国』所収の「客」の源泉が、ロシアのドゥホボール教徒の逸話にあることを発見した。カミュは、この物語の着想を、1929年に出版され、1952年に彼が読んだ『トルストイとドゥホボール教徒』という本から得たのである。（「トルストイへと向かうアルベール・カミュ — 『手帖』第7ノートにおける「客」の源泉」, *La Revue des lettres modernes : Albert Camus* 24, 2019）

【要旨】カミュは『最初の人間』の中心に「愛」を位置づけることを望んでいた。彼にとって、生きることは創造することと不可分であり、9冊のノートから成る『手帖』は、彼の作品が創られてゆくアトリエのようなものだ

った。カミュは1954年に『手帖』に修正を加え、その後も『手帖』を再読しながら、『最初の人間』という「夢見る作品」のプランを練りつづけた。カミュは、主人公が「再生」に到り着く小説を創造することに、自分自身の再生を賭けていたのである。

休憩

22:30 - 00:45 : 討論会

生きることへの愛、カミュと同時代の三人：アンドレ・ブルトン（ソフィー・バステアン）、
ジャン＝ポール・サルトル（根木昭英）、ルネ・シャール（フランク・プラネイユ）
司会：フィリップ・ヴァネ

【プロフィール】

・根木昭英：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程を経て、パリ第4大学大学院フランス文学・比較文学研究科博士課程修了。博士（フランス文学・フランス文明）。現在、獨協大学外国語学部フランス語学科専任講師。専門はジャン＝ポール・サルトルを中心とする20世紀フランス文学・思想。博士論文では、「ポエジー」の概念に着目し、ジュネ、マラルメ、フローベールら他作家をめぐるサルトルの伝記的批評から、彼の潜在的な美学－倫理体系を再構築するべく試みた。おもな論文・著書に« L'art comme « anthropodécie » : la moralité de la création artistique chez J.-P. Sartre », *Études sartriennes*, n° 17-18, Éditions Ousia, 2015 や *Jean-Paul Sartre : la Poésie de l'Échec*, Édition Universitaire de Dijon (近刊) など。

・フィリップ・ヴァネ：獨協大学名誉教授。1975年から日本に在住。カミュのジャーナリズム活動や政治的著作の研究を続けている。プレイヤッド版『カミュ全集』（2006年、2008年）の編集、『アルベール・カミュ事典』（ジャンニーヴ・ゲラン編、ラフォン社、2009年）、『アルベール・カミュ、カイエ・エルヌ』（2013年）に協力した。2010年、日本における最初の国際カミュ学会を組織した。いくつかの国際的な学会に参加し、最近のものとしては2018年ルールマラン地中海会議、2019年ミノルカ島のアルベール・カミュ地中海学会がある。ミナール社の『ルヴュ・デ・レットル・モデルヌ』カミュ・シリーズの編集者、日本カミュ研究会の『カミュ研究』の編集委員である。

【要旨】このシンポジウムを他の作家や詩人、そして他の地平へと広げることを願って、4人のパネラーが、単独でそして同時に他のパネラーとの対話の形で、カミュの同時代人であり、生涯の一時期に強いかわりをもった三人、アンドレ・ブルトン、ジャン＝ポール・サルトル、ルネ・シャールの生涯と作品に関連する諸局面を検討し、「生きることへの愛」のテーマの多様な意味について考察する。

休憩

01:00 - 02:00 : 講演Ⅱ：アンヌ・プルトー：生きることへの愛、女性の仕事？

司会：根木昭英

【プロフィール】アンヌ・プルトーはフランスの西部カトリック大学准教授（フランス文学）。国際カミュ学会会長であり、カミュの作品の普及に寄与し、2010年と2013年にはボンビドゥーセンターとの、また2021年にはジャンボン＝シュル＝リニョンの「記憶の場」との共催で、各種の学会を組織してきた。カミュに関する多くの論文を発表し、『アルベール・カミュ事典』（2009年）や『アルベール・カミュ カイエ・レルヌ』（2013年）に協力した。博士論文は『アルベール・カミュ 永遠の現在』（ポール・ヴィアラネー序文、オリゾン、ユニヴェルシテ／ドメヌ、リテレール、2008年）として刊行されている。共編に、『アルベール・カミュ「手帖」を読む』（セプタントリヨン、2012年）、『カミュ、芸術家』（PUF、2015年）、『カミュと聖性の眩暈』（PUR、2019年）、『カミュ、書簡作家』（A.I.R.E誌、第46号、オノレ・シャンピヨン、2020年）がある。

【要旨】カミュの作品において女性の姿はあまり目立たないとはいえ、何人かの女性の登場人物たちは、とくに戯曲のなかで、象徴的役割を演じており、忘れがたく記憶に残る。彼女たちは「生きることへの愛」を独占して

いるとは言わないまでも、各人が固有のやり方でこの主題に意味深い光をあてている。生の擁護者であり、瞬間に身を落ち着ける彼女たちは、抽象を逃れ具体的なものとどまり、いまとここにおいて愛を生きるようにと誘うのだ。生きることへの愛は、とりわけ彼女たちの仕事だろうか？

02:00 - 02:15 : 朗読 III (ジョルジュ・ヴェスィエール)

02:15 - 02:30 : 閉会式

ジョルジュ・ヴェスィエール：獨協大学専任講師。専門はフランス中世文学およびフランス語教育。
千々岩靖子：国際基督教大学客員准教授。おもな著作、論文に『カミュ 歴史の裁きに抗して』（名古屋大学出版、2014年）、「資料収集から小説創造へ—『最初の人間』の場合」（『カミュ研究』12号、2013年）、「『異邦人』再読—「歴史」の否定とその政治的含意」（『フランス語フランス文学研究』99号、2011年）など。

イラスト

Jacque Ferrandez / Gallimard / Mercure de France, Collection Catherine et Jean Camus,
Fonds Albert Camus, Collection privée, Jean-Pierre Bénisti

DESIGN

Office 407 / Birdcompany